

には2倍の増殖活性がみられた。

31. twy マウス由来培養骨細胞における ALP 活性調節機構について

寺門 淳 (千大)

遺伝性骨軟骨異常マウス (twy) の骨増生機構解明の目的にて twy と対照 ICR マウスより bone cell を得、その ALP 活性に与える副甲状腺ホルモン (PTH) の影響につき検討した。細胞の増殖期で PTH は twy および ICR の ALP 活性を上昇させた。一方、定常期では PTH は ICR の ALP 活性を不変もしくは低下させ、twy の ALP 活性を上昇させた。すなわち、ICR の未分化な状態 (増殖期) では PTH は ALP 活性を促進し、分化の進んだ状態 (定常期) では抑制した。しかし、twy では定常期における ALP 活性の抑制が認められず、ALP の抑制機構に異常が生じている可能性が示唆された。

32. 交感神経活動時のヒト皮膚機械的刺激受容器の感受性変化

竹内綱吉, 高橋 弦, 村田 淳
村上正純 (千大)
中島祥夫, 当間 忍, 坂本尚志
(同・一生理)

健康成人男女5例の右正中神経から記録した皮膚機械的刺激受容器からのユニットを同定し、受容器の広さを測定した。右第1趾に疼痛性皮膚電気刺激を与え、受容器の広さの変化を調べた。パチーニ小体で有意に広がった。

33. 脊柱側彎症に対する3次元解析

松本忠男 (千大)

脊柱側彎症における変形の形状およびその変形の可撓性を評価することにより、側彎変形の病態を解明することを目的として、特発性側彎症31例を対象とし、側彎変形を2方向同時X線撮影法による3次元解析装置を用い解析した。Top view による解析では側彎変形が大きくなるにつれて、カーブが前後方向に collapse していく傾向が認められた。Axial traction による矯正では、椎体回旋角は変形が大きくなると矯正が得られなかった。また側彎変形全体の可撓性と頂椎部での可撓性とは、相関が認められなかった。

34. ヒト悪性線維性組織球種細胞株 (MMF-1) の性状 (第2報)

米本 司 (千大)

独自に樹立したヒト悪性線維性組織球腫 (MFH) 細胞株 (MMF-1) の性状について検討し MFH の本態について考察を加えた。結論として、MFH にみられる線維芽細胞様細胞・組織球様細胞・多核巨細胞は同一クローンから派生したものであることが明らかとなった。また MFH の細胞起源は多分化能を有する未分化間葉系細胞であることが明らかとなった。

35. 培養膝関節靭帯細胞の性状分析

本田 崇, 山崎正志, 金 民世
(千大)
藤村真示 (同・一生化)

8週齢、オスの日本白色家兎の前十字靭帯 (ACL)、内側側副靭帯 (MCL)、膝蓋腱 (PT)、腸脛靭帯 (ITT) の各細胞を単離、培養し、Transforming Growth Factor- β の細胞増殖能 (チミジンの取込み) に対する作用を明らかにすることを目的とし実験を行った。結果は ACL, MCL, PT, ITT とともに TGF- β の 10ng/ml 添加により有意なチミジンの取込みの抑制が認められたが、低濃度では一定の傾向を認めなかった。

36. 腰椎椎間板前方の感覚神経支配について

森永達夫, 高橋和久 (千大)
千葉胤道 (同・三解剖)
高橋 弦
(国立精神神経センター国府台)

腰椎椎間板の神経支配ははまだ解明されていない。われわれはトレーサーを用いて腰椎椎間板前方の支配高位を検討した。SD 系雄ラット10匹を用い経腹膜侵入で L5/6 腰椎椎間板前面に HRP 結晶を置いた。48時間生存後灌流固定して後根神経節を摘出、TMB 法で発色して観察した。その結果、10匹中7匹で発色がみられ、そのうち7匹で L2, 5匹で L1 後根神経節が染まった。以上より腰椎椎間板は、当該高位より上位の神経支配であることが示唆された。